

秀賞

誰かの明日のために 山形県山形市立第二中学校 3年 大江 達大

「早く 16 歳になりたい。もっと早く。」初めて赤十字のボランティア活動に参加した日の帰り道、何もできない無力感と、それに反して、新たな決意と覚悟が僕の心の中で確実に芽生えた。

赤十字活動に興味を持ったのは、学校で配られたボランティア活動のプリントがきっかけだった。「献血ルームのボランティアを通じて献血を知ろう！」と書かれている言葉を見て、何の迷いもなく申し込みをした。なぜなら僕は定期的に大学病院で骨の検査をする機会があり、重症患者と思われる方が大勢いることを知っていたからだ。つらそうにしている姿を見るたびに、「誰かの役に立ちたい。誰かを救いたい。」そんな思いを抱くようになっていた。

ボランティア当日、初めて献血ルームを訪れた。清潔な室内と、温かい笑顔で迎えてくれたスタッフの方が印象的だった。そして僕は朝礼に参加し、自己紹介をした。スタッフの皆さんに、ボランティアに参加してくれたことを心から喜んでくださり、緊張していた僕の気持ちが少し和らいだ。僕はその時に気付いたことがある。それは普段から、安心して献血が受けられるように、優しい笑顔やゆっくり話しかけることを心掛け、皆さんにリラックスできるよう最大限の心配りをしているということだ。

僕の役割は、献血に来られた方の受付や案内、そして空いた時間で、赤十字活動の広報誌を 1 枚ずつ丁寧に折り込んでいく作業だった。そして、いよいよその時がきた。

「リスト番号〇番〇〇さん。こちらまでお願いします。」最初の一声を出す時、心臓が高鳴った。しかし、スタッフの役目は献血に來た方をなるべく安心させてあげることだ！ と思い、僕は笑顔で案内することを心掛けた。何度も受付と案内を繰り返していくうちに、笑顔を返してくれる人や、世間話をしてくれる人もいた。短い会話の中にも、人とのつながりを感じられることがとてもうれしかった。

その日の献血に來た人の人数は 68 人。比率は、男性が 8 割、女性が 2 割くらいだった。そこで僕は忘れられない感動的な場面に立ち会えた。献血対象年齢が最後となる 69 歳のおじいさんが、なんと 100 回目の献血記念日を迎えた日だった。誰かの命を救うために、100 回も献血をしてきたおじいさんの姿から、本当の深い優しさを知り、僕に大きな勇気を与えてくれた。

皆さんには知っているだろうか。200ミリリットル献血は男女共に16歳からできることを。献血された血液は、手術や事故の時だけでなく、白血球やがんなどの病気と闘う人たちにも使われている。血液はこうした人たちのために毎回使われているのだ。しかし、血液には生きている細胞が入っているため、長期保存ができない。病院に血液を届けるためには、毎日新しい血液が必要になるのだ。しかし、実際に僕が受付や案内をした方で、献血が初めての人が一人もおらず、献血を何度も経験されている方ばかりだった。しかも若い人が全くいない。僕は献血に来る人が固定化されているようにさえ感じた。赤十字社のパンフレットの中に、「年代別献血者グラフ」が載っている。それを見ても、若い人の献血が年々減っている事実を知った。僕が早く16歳になりたいと思ったのは、この事実を知ったからだ。もし、献血ルームのボランティアを経験していなかつたら、この問題を身近なものとして考えることはなかっただろう。また、輸血を使う血液は、まだ人工的につくることができない。だからこそ、今すぐに献血の協力が必要なのだ。

僕は、今回のボランティア活動を通して、二つの大切なことを学んだ。一つ目は、「自分から行動する勇気」だ。僕はこの活動後、献血のことを家族や親せきに伝えて、「助け合いの輪」を広めるミッションをした。それは小さな行動かもしれないが、僕は確実に一步踏み出していた。二つ目は、「目に見えない支える力」だ。献血の受付と案内の合間に赤十字新聞を折りたたむ仕事があった。その新聞の内容は、「世界の核爆弾の所有数を減らすために声を上げよう！」という内容だった。この赤十字活動は、多くの人に世界平和を真剣に考える機会を与えてくれる。その新聞を折りたたむ作業も大切な「目に見えない支える力」になっていると感じた。

「チャレンジ」という言葉は、大きな夢や目標に挑むことだけを指すのではなく、小さな勇気を出して一歩踏み出すことも、立派なチャレンジだと思う。僕は、献血できる年齢になったら、必ず協力したい。そしてどうかあなたの勇気ある一歩をください。誰かの明日の笑顔をつなぐために。